

The mysterious Japanese smile should be understood in the context of the social situation. When a Japanese commuter misses a bus, he smiles if there are other people on the site, but he does curse if there is nobody around. He has to hide his embarrassment in public, but he can let out his emotion in private. Similarly, a TV interviewer may keep smiling while he is asking a politician harsh questions in an effort to show that however cruel he may sound, he does not mean to be. (関西学院大学)

この下線部和訳をやや難しめにしているのは、in an effort 以下の存在である。

Similarly, ... questions までの文構造はごく基本的なものであり、この文構造がつかめない人は難関大受験生にはまずいないだろう。単語も基本レベルであり、国語が得意でない人でも日本語に置き換えるのにそれほど苦労はしないはずだ。

問題は in an effort 以下がどこにかかる(続く)かである。一見すると while 以下の一部に見える。その場合、意味をいっさい無視すれば、直前の harsh questions にかかる形容詞句という解釈もあるが、それでは言語表現として意味をなさない。では is asking にかかる副詞句かという、これも意味的に成り立たない。そこで、while 節を飛び越えて、主節の may keep smiling にかかるという発想が浮かぶかどうかだ。

しかし語順を入れ換えて

Similarly, a TV interviewer may keep smiling in an effort to show that however cruel he may sound, he does not mean to be while he is asking a politician harsh questions.
としたらどうだろう。

これなら may keep smiling にかかることは一目瞭然である。この語順でも特に問題はないが、in an effort ... to be と while ... harsh questions とでは少し語数に差がある。短いものを先に持ってくるという英語の一般的傾向に従うと、元の語順になる。要するに、in an effort 以下も while 以下も主節の動詞にかかる副詞の働きに変りはない以上、どちらを先に言うかは case by case ということになる。

元の語順で in an effort の前にカンマを打ってくれば、読みやすく(文構造をつかみやすく)なるかもしれないが、カンマの有無は書き手の文体(好み)によるところが大きいことは常に頭に入れておきたい。

なお however cruel he may sound, he does not mean to be. = no matter how cruel he sounds, he does not mean to be (cruel).
である。

[全訳]

不可解な日本人の微笑みは、他者との関係という文脈において理解されるべきだ。通勤途中の日本人がバスに乗り遅れると、その場に他人がいれば笑みを浮かべるが、もしまわりに誰もいなければ実際に悪態をつく。彼は人前では自分の当惑を隠さなければならないが、誰もいないところでは自分の感情を吐き出すことができるのだ。同様に、テレビのインタビュアーは、政治家に厳しい質問をしている間も、自分の言うことがどんなに辛辣に聞こえようと、そんなつもりはないことを示そうとして、微笑み続けることだろう。

Although as a girl growing up forty years ago in the U.S. Midwest I was passionately fond of reading, I can't say that I ever read much — or any — Japanese literature. For the most part content with American children's classics like "Little Women", the Laura Ingalls Wilder series, and "Tom Sawyer" I had no more desire to sample the literature of Japan than I had to eat fish and rice for breakfast instead of cereal and milk. (名古屋大学)

下線部を一読して、お馴染みの no more ~ than ... の構文(いわゆる鯨の公式)であることが見抜けたかどうかで、前哨戦は終わる。これをクリアすれば、とにかく「~でないのは ... でないのと同様である」という訳に持っていけばよいことになる。なぜそう訳すのかについては、「[重要英語文法解説](#)」[比較の表現](#) 参照。

問題は than 以下の訳し方である。形は肯定文だが「... でない」と否定で訳せばよいのだから、had to eat と言っているのを、didn't have to eat に置き換えて訳せばよいのだと考えた人は、比較表現の本質が分かっていない。簡単な例文で考えてみよう。He is older than you (are). という表現に疑問を抱く人はおそらくいないだろう。では He is older than you are old. はどうか。見たことも聞いたこともないはずだ。しかし than は前置詞的に用いられることもあるが、本来は接続詞である。だから than you are と S+V を続けることができるのだ。ところが are の後に補語であるはずの old が置かれることはない。

別の文を例に取ろう。I have more books than you (have). とは言っても、I have more books than you have many books. となることはない。この場合には、他動詞 have の目的語である many books が消えていることになる。このことは、同等比較の He is as old as you (are). や I have as many books as you (have). の場合も同様である。

なぜ than [as] 以下でこうした消去が生じるのかとなると、これは手強いテーマである。ただ少し文法を勉強した人は、I have more books than you have. の than や I have as many books as you have. の as について疑似関係代名詞という説明を聞いたことがあるだろう。つまり先行詞に比較級の形容詞がついているときには who, which の代りに than を用い、先行詞に as, so, such, the same がついているときは as を用いるという説明である。

なるほど、それなりの解説にはなっているが、これはあくまでも名詞が消去されている場合に言えることであり、形容詞が消去される

ことの説明にはならない。疑似関係代名詞とは言い得て妙であり、関係代名詞とは似て非なるものだと言っているのだ。

一方, than や as には主語や補語や目的語を省略・吸収する働きがあるという解釈をする人もいる。これもそれなりに説得力のある解釈である。例えばお馴染みの as it is often the case with～などにも共通する説明である。ただし、これはいわゆる比較の表現ではない。

いろいろな case があり、一刀両断というわけにはいかないが、私の解釈はこれらの解釈とはいささか異なる。あまり深入りすることには興味がない人もいるだろうから、以下の例でニュアンスを理解してほしい。

He is as old as you (are). や I have more books than you (have). の as old や more books は、あくまでも後ろの as 以下, than 以下を基準とする相対値であり, He is five years old. という表現の five years old に近い。つまり「彼は5歳だ」と言っているのであって「彼は年寄りだ」と言っているわけではない。しかし He is old. と言えば「彼は年寄りだ」と言うことになる。同様に, He is older than you are old. としたときの you are old は基準となる絶対値であり, 文字通り「君は年寄りだ」と言っていることになる。もちろんこれは話者の意図に反する。この心理的な作用こそが than 以下で old が消去されることの真意であろう。

話を下線部に戻そう。I had no more desire to sample ... than I had to eat fish は than I had much desire to eat fish の much desire の消去であり, 日本語に訳すときはこれを補って, しかも鯨の公式に従って否定文に訳すことになる。下線部訳としては相当にレベルが高い部類に属するが, こうした文法・構文的解釈にとらわれることなく, 文脈を追って見事な日本語に訳せる人もいる。そういう人は sample という動詞の意味も文脈からほぼ読み取ってしまうのだ。人間の個人差は誠に著しいと言わざるをえない。ただしそういう人はけしって多くはない。

[全訳]

40年前アメリカの中西部で育つ子供だったころ、私は読書がものすごく好きでしたが、日本文学をそれほど、あるいは少しでも読んだことがあるとは言えません。たいていは、『若草物語』や『大草原の小さな家』や『トム・ソーヤの冒険』のようなアメリカ児童文学の古典に満足していたので、私が日本の文学を試しに読んでみたいと思わなかったのは、シリアルとミルクの代わりに魚と米を食べたいと思わなかったのと同じでした。

Professor McClellan traced the development of poetry in Japan from Kakinomoto no Hitomaro to Matsuo Basho and beyond, and this time, for whatever reason, my imagination was snared. (1) Perhaps it was the professor's own unconcealed enthusiasm and respect for his subject. In any case, that lecture marks a turning point in my life. Walking home afterward, I told myself, at age sixteen, that here was something worth devoting a lifetime to: the study of Japan. How little I knew about the country, how much there was to learn! I myself might have been the eager frog, and (2) Japan, with all its undiscovered riches of language, literature and tradition, the ancient pond just waiting for me to dive in. (名古屋大学)

下線部(1)の it は何を受け(指し)ているのか。ポイントはこの1点である。この it が時間、天候、状況、あるいは日本人には本当のところよく分からない非人称の it 等でない限り、とりあえず「それ」と訳しておけば、一応日本語にはなるが、それで合格点がもらえるはずはない。しかし「それ」と訳しても一応の日本語として成り立つということがヒントになる。つまり前に述べられている単語なり文の内容なりを受けていることの証左となる。事実、it は前の文の my imagination was snared を受けているのである。

ただし、この場合は、少し変形を加えて snared my imagination とする必要がある。そして 前に that を加えて、これを一気に下線部の最後に持っていく。すると
Perhaps it was the professor's own unconcealed enthusiasm and respect for his subject that snared my imagination. という文が出来上がる。

少し力のある人なら、これが it is [was] 名詞 that ... の強調構文であることは容易に分かるはずだ。強調構文の that 以下の内容が前に述べられているときに、これを省くのは少しも珍しいことではない、というよりは、むしろ当然のことである。

cf. I saw him last year for the first time. And it was by chance (that I saw him last year for the first time). = it is [was] 副詞句 that ... の強調構文

ただし、it が何を受けているのかについては、the reason を受けているという解釈も成り立つ。this time, for whatever reason, my imagination was snared. を省略を補って書き換えれば
this time, for whatever reason it might be, my imagination was snared. ということになるからだ。

Perhaps the reason was the professor's own unconcealed enthusiasm and respect for his subject.

しかしこの場合も、補った it might be の it が指しているのは my imagination was snared という後ろの文の内容である。したがってこの二つの解釈の差はかぎりなく小さなものになる。一応、両方の訳を載せてみる。

下線部(2)のポイントは and 以下に述語動詞がないと気づくこと、そして英語では述語動詞も省略されることがあるという知識である。この知識がないと、この下線部訳はまったく手に負えなくなってしまう。もっと分りやすい例を見ていこう。

Tom likes baseball, and Dick (likes) football.

次の文は少し難しいが、覚えておいたほうがよい。

To err is human, to forgive divine. (諺)

=To err is human, (and) to forgive (is) divine.

「過ちを犯すのは人の常、許すのは神のわざ」この human と divine は共に形容詞。

これが理解できれば、あとはどこに何が省かれているかだ。

下線部の主語が Japan であること言うまでもない。したがって、and の前の文の述語動詞 might have been をどこに補うかが分かればよい。カンマが3箇所あるので、どの部分が前後カンマの挿入句かを見誤りさえしなければ、問題はない。

Japan, with all its undiscovered riches of language, literature and tradition, (might have been) the ancient pond just waiting for me to dive in. となる。

[全訳]

マックレラン教授は、柿本人麻呂から松尾芭蕉に至り、さらにはそれ以降に及ぶ日本の詩歌の発展の跡をたどったのですが、今度は、理由は何であれ、私の想像力はその虜(とりこ)になってしまったのです。(1)たぶん、私の想像力を虜(とりこ)にしたのは、教授自身が、自分の扱っている主題に対して隠しようのない熱意と敬意を抱いていたことでしょう。[たぶん、その理由は、教授自身が、自分の扱っている主題に対して隠しようのない熱意と敬意を抱いていたことでしょう。] いずれにしても、その講義は私の人生の転換点を画するものです。講義が終わった後、家に歩いて帰る途中、16歳で私が自分に言い聞かせたのは、ここに一生を捧げるに値するものがあるということでした。それは日本の研究でした。当時、私は日本についてどれほど無知で、学ぶべきことがどれほどたくさんあったことでしょう。私自身が熱心な蛙だったのかもしれませんが。そして(4)日本は、言語や文学や伝統という未知の豊かさに恵まれていて、まさに、私が飛び込むのを待っている古池だったのかもしれません。

From the difference in the apparent position of the North Star in Egypt and Greece, Aristotle even quoted an estimate that the distance around the earth was 400,000 stadia. (c) It is not known exactly what length a stadium was, but it may have been about 200 yards, which would make Aristotle's estimate about twice the currently accepted figure. (大阪外国語大学)
(注) stadia: stadium (スタディオン=長さの単位) の複数形

まず It と it がそれぞれ何を指しているを間違えないこと。しかし、間違える人はそうそういないだろう。It=仮主語で、exactly what length a stadium was という間接疑問文を受けている。exactly は what 以下の一部ではないと思った人は exactly という副詞は、前または後から疑問詞を修飾する働きがあることを覚えておこう。

後の it=a stadium は言うでもない。問題は、非限定用法の which の先行詞は何かだ。単語なのか、それとも文の内容なのか。しかし単語だとすると about 200 yards ということになるが、それで文意が自然に通じるだろうか。

そして最大のポイントは、which would の would の解釈である。前に It is not known という現在時制の文と、it may have been という過去時制に相当する文の両方があるために、仮定法過去なのか、直接法過去(実際に過去のこと)なのか判断に迷うところだ。

そして、もし仮定法だとしたら、if節に相当する働きをするものは何なのか。ここで、主語がif節の働きを兼ねる仮定法 (A true friend would not say such a thing. 本当の友人ならばそんなことは言わないだろう。) という発想が出てくるかどうかだ。しかも、主語は関係詞の which である。

以上のヒントで、はたして次のような訳が出来たかどうか。

[全訳]

エジプトとギリシアでの北極星の外見上の位置の違いから、アリストテレスは、地球の一周は40万スタディオンであるという概算すら出していた。1スタディオンが正確にどれくらいの長さだったのかはわかっていないが、200ヤード(183メートル)ぐらいだったかもしれない。もしそうだったとすれば、アリストテレスの概算は現在認められている数字の約2倍ということになるだろう。

補足：もしそうだったとすれば＝もし1スタディオンが約200ヤードだったとすれば

The word "face" expresses very well this sense of how someone is seen or sees another. The Japanese mother teaches her child not to do or say certain things "or else people will laugh at you." This is a concern for face and appeals to the primary means of social control in the culture, shame. Japan is often identified as a "shame culture," where proper behavior is ensured through outside social pressure. This contrasts with the kind of controls identified with American, and Western societies generally, where it is the internal feelings, guilt, that are said to guide behavior. This is the matter of "conscience," or of being "God fearing." This well known distinction between shame cultures and guilt cultures is, of course, not so clear cut. (富山大学)

①主語の This が何を受けているかを把握した上で、それを訳に出すかどうか。最近の入試では、「This が指す内容を明らかにして日本語に訳しなさい」という指定がなければ「これ、このこと」ですませることも許されるだろう。しかし「これ」と「このこと」がいつでも入れ換え可能なわけではない。文の内容を受けているのか、それとも単語を受けているのか、さらに文の内容の一部を受けている場合、結果的に単語を受けていることもあるからだ。

This contrasts with the kind of controls ... を見ると、This と対比されているのは the kind of controls という名詞なので、This も名詞を受けていると考えるのが自然であり、その場合、outside social pressure を受けていることになるが、controls にかかる修飾語句 identified with American, and Western societies generally, where ... は、その前の Japan is often identified as a "shame culture," where ... に対応していることがわかる。少々、屈折した言い回しであり、あまり明解な言語表現ではない。つまり前の文の内容全体を受けながら、直接的には outside social pressure を受けているのだ。

② identified with ... つまり identify A with B の意味である。基本的な訳語である「AをBと同一視する, 同一のものとみなす」では不自然なことは明らかである。consider A to be connected with B; relate A to [with] B つまり「AをBと結びつけて考える」の意味に解すれば自然な日本語になる。

③ American, and Western societies generally の generally(= in general) は、名詞の後から形容詞的に名詞を修飾する副詞。
cf. Young people (of) today tend to be indifferent to politics.

④非限定用法の関係副詞 where の処理。先行詞=American, and Western societies generally は容易につかめるが、形通り非限定用法で訳すか、それとも限定用法的に訳し上げるか。つまり、先行詞が固有名詞や実質的に固有名詞に相当する場合の非限定用は、日本語では訳し上げて多少も違和感はない。

cf. Next week I will visit Kyoto, where my father was born and bred.

ただし本下線部の場合には、where 以下の長さからすると、非限定用法で訳したほうが無理がない。

⑤ it is ~ that ... =強調構文

⑥ the internal feelings と guilt は当然、同格、言い換えである。

[全訳] (関係詞節の訳は二通り例示した)

「面目」という言葉は、人が他人にどう見られているかあるいは他人をどう見ているかというこの感覚を実によく表している。日本の母親は自分の子供に、或ることをしたり言ったりしてはいけません、「さもないと人に笑われますよ」と教える。これは面目に対する気遣いであり、恥という、日本の文化における社会的抑制の第一の手段に訴えているのである。日本はしばしば「恥の文化」であると認識され、「恥の文化」では、適切な行動は外的な社会の圧力によって保証される。これは、アメリカや西欧の社会一般と結びつけて考えられる類(たぐい)の抑制とは対照的であり、欧米の社会では、行動を導くと言われているのは罪という内面的な感情である。これは「良心」の問題あるいは「神を恐れる」という問題である。もちろん、恥の文化と罪の文化というこのよく知られている区別はそれほど明確なわけではない。

[別解例] これは、アメリカや西欧の社会一般と結びつけて考えられる類(たぐい)の抑制とは対照的である。なぜなら欧米の社会では、罪という内面的な感情こそが行動を導くと言われているからである。

下線部後の the matter of "conscience," or of being "God fearing" の or は同格(言い換え)の or である。God [god] fearing=形容詞